

園田

季は	地は	シテ	ツレ	ワキ
雜	尾張	神体	神子	社人
			トモ	社人の従者
			ワキヅレ	寄手

「抑是は津島の天王に仕へ申す社人にて候。今日は御神事にて候ふ程に。各罷り出で御神事を執り行はゞやと存じ候。

次第
「岩間伝ひの谷川も。く。瀬をせく水や増さるらん。

詞
「是は尾州の傍に園田と申す者にて候。さても天王の神子に。月光女と申す神子の息女に。玉光女と申す神子。國中一の美人にて候。あはれくと存

じ候へども。一度も常は神前に出ださず候。今日は御神事にて候ふ間。神前に出ださぬ事は候ふまじ。参詣申し何ともして奪ひ取らばやと存じ候。

地
「足引の。山した滝つ岩波の。く。心碎けて数々の。

思ひの末は如何ならん。げにや人も又。踏み見ぬ山の岩がくれ。流るゝ水を我袖に。洩らさばそれぞ命の。限りなるべきとばかり。思ふ心のはかなさよ。く。

「神垣は神の御室の神なれば。神の御前に繁りあふ。

貴賤群集ぞ有難き。

「我は又。さらぬやうにて立ち寄り見れば。げにも玉光女なり。心も空にかはり。それく宮人御神樂を。急ぎ給へと勧むれば。

地「其色々の役々の。拍子を揃へ歌ふなり。

ミコ「榦葉の。香をかぐはしみとめくれば。八十氏人ぞ

円居せりける。 (神樂)

「みてぐらは。我にはあらず天にます。豊岡姫の宮のみてぐら。豊岡姫のみてぐらなり。

地「さるほどに。く。折節よしと。一同に走り寄り。

とうく神子を貴賤の中に。飛鳥の如く飛び翔つて。行方も知らずぞなりたりける。

ワキ「何と申すぞ。玉光女を奪ひ取りて行くと申すか。

やるまじいぞ。

トモ「暫く候。今日は御神事なり。明日はさし寄せ腹切

らせん。

ワキ 「げに／＼是も理りなり。神慮もさぞな神樂歌に。祝ひこし神は祭りつ明日よりは。組の緒をしめ遊び太刀はき。今日は還御急ぎつゝ。

地 「明日はさし寄せ園田を。／＼。討ち取り本望を達せんと。詮議をなして帰りけり。／＼。

ヨセテ 「明くる空。遅しと告ぐる庭鳥の。八声の闇をつくりけり。

ワキ詞 「如何に園田たしかに聞け。天王よりの御使に。御榊持たせて参りたり。出でよや出でよと罵りけり。

園田 「園田是にあり。何のための御使にて候ふぞ。

ワキ 「何のためとは玉光姫。あまりに暗々と奪はれたる。無念散ぜん為めぞとよ。

園田 「神慮に更に対し申さず去りながら。面々をたゞに

てはいかで帰すべき。此の矢一筋うけて見よと。

地 「十三束を打ちつがひ。／＼。よつ引き放つ其矢の。

不思議や行方も白真弓。あら面目なや候。さて
は早運櫻弓。くぞと心得て。弓切り折つて遙に
投げ捨て。大太刀おつ取り。追手より切つて出づ
れば。勇み勇む。社家の若武者。打つ太刀を受
け流し。飛べば横太刀出ださせず。さつとむすび
上げ。一太刀に勝負を見せにけり。

ワキ 「然れども宮人。

地 「然れども宮人。身命を軽んじ。長刀とりのべ。

園田を目がけてかゝりければ。当の矢一筋かへさ
しく。待てよや待てと雲の上に。大音声こそ聞
えけれ。

シテ 「神体大牛に乘じ給ひ。

地 「神体大牛に乘じ給ひ。汝まさに。射る矢は社頭の
扉を貫く。当の矢一筋。神通方便の御弓に打ち番
ひ。放ち給へは。雷電まさに落ちかゝる如く。天
に仰ぎ地に倒れ。逆さまに櫓より。遠近の土とな

る。

ワキ
「此時宮人。

地
「此時宮人。あふぎて神恩の高きを感じ。臥して結
縁の深き川波に。うづまひめぐる。く。水の煙
に立ちまぎれて。神は上らせ給ひけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第四輯』大和田建樹著